

2016年6月6日 Vol.29

### 日本の株式市場には魅力あるバリュー株があふれている

昨年6月に為替市場はドル円の最安値1ドル=125円85銭をつけ、為替面で円安メリットを享受する輸出関連企業を中心に株価は上昇し日経平均は20,952円71銭の高値をつけました。それから1年を経過し為替は円高に動き、株価は高値から20%もの下落を見せています。ただ、これをドルに換算した場合、166ドルの日経平均が現在156ドル程度になっているに過ぎないことに気がつく必要があります。日経平均は一部の銘柄を集めた指数にしか過ぎませんが、その指数自体が売り買いされている状況でその指数を構成する多くの銘柄が機関投資家の売り買いの対象となっていて、多くはプレミアム(市場平均以上の評価)がついた状態となっています。多くの主要メディアは手っ取り早く日経平均の変動を伝えがちで、個人投資家もそうしたメディアの報道に一喜一憂しがちですが株式市場の中身をもう少し冷静に分析したら、直近の株式市場が新たな視点で動く可能性があることに気がつく必要があります。

日本の株式市場には現在3,650余りの銘柄が上場していますが、そのうちの半分以上がPBR1倍割れの状態となっています。その中には足下の業績が悪い企業や有利子負債が増加し財務上の問題を抱える企業もあるかも知れませんが、技術力に優れ、比較的業績が良いにも関わらずPERが低く配当利回りも高いという魅力的なバリュー株があふれているように見受けられます。

もちろん成長性を求めての投資が王道とすればそうしたバリュー株の魅力は上場したばかりの成長指向の企業に比べれば乏しいと言わざるを得ない面もありますが、中には企業価値を投資家が見抜けないまま株価が放置されているケースやIR不足で十分に投資家が認知しないまま推移しているような銘柄も存在するに違いありません。

多くの投資家はリスク分散の意味から投資対象銘柄を特定のセクターや市場に集中し過ぎないように努めておられるのかも知れませんが、今後円高の潮流が続くという前提に立てば多少は内需系の中小型銘柄、とりわけ魅力的なバリュー銘柄に分散投資することで成果を高める必要があります。また、5月はお休みだったIPO市場は6月15日から再開します。IPO市場には内需系のマザーズ上場の銘柄が多数出て参ります。円高トレンドがなおも続くとすればますますこうした中小型バリュー銘柄、IPOしたての成長期待銘柄への関心が高まる可能性があります。6月の株式相場はやや波乱の商状が見られますが、魅力あふれる銘柄に彩られた日本の株式市場は決して希望が消え失せた訳ではなく新たなトレンドの始まりが期待できそうだとポジティブに感じる必要があります。

(東京 IPO コラムニスト 松尾範久)